魔王（正義）になりました。

茜空　裕

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔王（正義）になりました。

【Ｎコード】
Ｎ０７６０Ｘ

【作者名】
茜空　裕

【あらすじ】
ある夏の日、高校２年の松岡優介は一人の痛い少女と出会った。少女は神と名乗り、優介に私の世界の魔王になってほしいと頼まれる。条件付きで優介は魔王になることを決め、少女の創った世界に飛ばされる。そこはＲＰＧのような世界・・・の筈がＲＰＧの常識からボール一個分ほどずれた世界だったわけで。魔王になる筈だったのに、魔王らしからぬことをする羽目に・・・。

０１　痛い子に付きまとわれて

「魔王になってください！！お願いします！！」

「・・・・・・・・・・・・・はいィ？」

高校２年生となった夏のある日。

無性にアイスが食べたくなり、近場のコンビニへ出かけたとき。

ガリ〇リ君ソーダ味をとりあえず３本買い、店を出た直後だった。

「お願いですー！一生のお願いですから！！私の世界の魔王様になってくださーい！！」

一人の少女につかまった。

色白の肌で、真っ白なワンピースを着た、黒い長髪の１０歳ぐらいの女の子。

「え？あ、なに？なに君？なに言って――――」

「本ッ当にお願いしますってー！！魔王がいなきゃ世界が完成しな

いんですよ！！だからっ、だからぁ――！！」

（・・・うっわー、なにこの子。なんだよこの子。これが俗にいう痛い子？発言が痛い、存在が痛い。おまけに周りからの視線が痛い）

これは関わっていけない子だと思い、目も合わせずに去ろうとする。

しかし痛い少女はしつこく付きまとい、『魔王様、魔王様にー！！』と叫びながらすぐ後ろについてくる。

他人のふりをしようにも、少女が俺に向かって叫ぶのでは俺が無視しようと関係がない。

・・・歩いていても埒があかない。

ここは全力で走って痛い子をふりきる。

俺は一瞬歩くのを止めて、ピタッと止まる。

チラッと後ろに目をやるといきなり止まった俺に向かって首をかしげる少女の姿。

そして、ダッ！！と地面を蹴った。

「！？逃げた！あの人間逃げやがった！！くそー、私は絶対諦めないからね！！」

背後から負け惜しみともとれる声が聞こえてきたが無視だ。

俺は早く家に帰ってガリ〇リ君を冷凍庫に片付ける任務がある。

一度溶けたガリ〇リ君はガリ〇リ君にあらず。

そんなこんなで数分が過ぎた。

我が家に帰った俺はすぐに玄関をくぐり、キッチンにある冷凍庫にガリ〇リ君を放り込んだ。

どうも今は家族はみんな外出中のようだ、物音一つしない。

少しばかり走ったので喉が渇いた。

冷蔵庫にあるコカ・〇ーラをコップに一杯、一気に飲み干す。

喉を刺激する炭酸が一気に駆け抜ける。

「ゴクッ・・・ゴクッ・・・ふう。やっぱ炭酸はコーラに限る」

「だねー。コーラ以外の炭酸は認めれないよ、異論は認めるけど」

「ブフ――ッ!!」

一度飲んだコーラを少量の胃液と共に吹き出す。

ブクブクと泡をたてて床を濡らすコーラを見た少女は顔をしかめて言う。

「うわ、きたねっ。これぐらいのことでそんな驚いてるんじゃ立派な魔王になれないよ？」

「ゲホッ、ガホッ・・・な、なんでお前がここに・・・？てかいつから、足音一つ聞こえなかったぞ・・・？」

俺は声がした方にゆっくりと振り返った。

そいつはダイニングテーブルの上に座り、手を頭の後ろで組んでニコニコ笑いながら足をせわしなく動かしていた。

キッチンに来たときは確かにいなかった、はずだ。

気付かれないようにここに来るのはまず無理だ、物音ひとつしない家じゃ小さな扉を開く音さえ響く。

最初からどこかに隠れていると考えてみたが隠れる場所なんかどこにもない、まずなぜこいつが俺の家を知っているのか。

「お前・・・一体なんなんだよ・・・？」

「よくぞ聞いてくださった！」

少女はそういうとテーブルの上に立ちあがる。

そして俺をビシッ！！と指さすと真剣な顔で叫んだ。

「そう、私こそは！」

すると今度はテーブルからジャンプしてクルクルと回転しながら床に降りる（そのあとの決めポーズは欠かさない）。

その身のこなしは、とても１０歳程度の少女にできるようなものではなかった。

再び少女は俺に両手でビシシィッ！！と指さし、長い髪をグルングルン振りまわしながら衝撃的なことを叫んだ。

「神と神の間に生まれた神の一人だぁ――！！」

０１　痛い子に付きまとわれて（後書き）

新作です。
もう一つの小説が終わっていないのに新作です。
ただでさえ沢山書いてるのにまた書いちゃいました☆
中から管理できなくなって更新が遅れるかもですけど、なにとぞよろしくお願いします。

02　不思議な少女の不思議な力

「・・・・・・・・・」

「へへーん凄いでしょ！まだまだ未熟ではあるけど、それでも世界を一つ作れるほどの・・・ちょ、痛い痛い！止めてよ！何すんの！？」

俺は少女にそっと近寄って首根っこを掴みにかかった。

これ以上迷惑をかけられたら正直ウザイ。

一度親のところに連れて行って文句を言ってやる。

ついでに近場の精神病院に行くことをお勧めしよう。

「だから痛いって！髪、髪まで引っ張ってるって！」

「うるさい。とりあえずお前の家教えろ。お前の親と話したいことがある」

今の場面を見られたら俺は犯罪者さんの仲間入り確定だろう。

まあ、家の中だから誰かに見られる心配はないだろうけど。

しかしこんなにうるさいと声が外まで聞こえそうだな・・・一応、口も縄で縛って・・・って何考えてるんだ俺。

「痛い痛っ・・・！！痛いつってんでしょーがァァァ！！」

少女はブチ切れると右手を大きく振り上げて人差し指で俺を指した。

・・・何も起こらない。

場の空気が一瞬でしらける。

「さっきから何のつもりだ・・・。こっちは良い迷惑でだな――――ッ！？」

それは突然だった。

突然、身体が動かなくなった。

身体の自由が利かない・・・！？

まるで金縛りにあったかのように、息苦しくなり呼吸が荒くなる。

何だこれ・・・どうして身体が動かない・・・？

俺はそのままバランスが崩れ、床に倒れこむ。

首から上は何とか動く、俺は少女を見た。

少女はまるで勝ち誇ったかのような表情で語りかける。

「全く、さっきから痛いって何度も言ってるのに・・・。止めてくれないから天罰下しちゃった☆」

「て、てめえ・・・何しやがった・・・！？」

「あれ？まだ動けるんだ・・・流石私が目をつけただけはある！」

少女はフフーンと鼻を鳴らし、自慢げに腕を組む。

ふと、少女は俺の傍にしゃがむと鼻をツンツン突いてきやがった。

ガゥ！と指に噛みつこうとするが慌てて手を引っ込めたので届かなかった。

それが面白かったのか、少女はキャッキャと笑い始めた。

・・・うぜぇ。

「んー、鼻を突くのも面白いけどなー・・・やっぱこっちの方がお約束かな？」

そういうと少女は右手を前に突き出した。
そして、俺は目を疑った。

「ほいっ」

「はァ！？」

どういうことか、少女の右の掌から突然油性ペンが出てきた。
何も無いところから、魔法でも使ったのか。
あまりの光景に俺は声も出せず口をパクパクと動かすだけだ。
少女は油性ペンのキャップを外すとフンフン♪と鼻歌交じりに俺の顔に落書きし始めた。
しかし俺は抵抗もせずにただ茫然とするだけ。

「やっぱ落書きと言ったら髭かな・・・いや、頬に渦巻きも良いかも。額に肉は絶対だし」

「お、おま・・・なんだ今の・・・？なんで何もないところからペ

ンが・・・！？それ以前になんで身体が動かないんだよ！？」

やっとの思いで俺は言葉を発することができた。

少女は俺の叫びに特に驚いた様子もなく、ただ淡々と告げる。

「だから私は神なんだから、これぐらいできないと駄目なんだよ。学校じゃ実技テストだって出るんだからね。・・・あ、本題」

少女はポンッと手を叩くとペンを適当に放り投げ、こちらと向き合う。

「それでね、さっきから何度も言ってることだけど・・・私の世界の魔王になってくれないかな？かなかな？」

０３　新たな生活は魔王として

「・・・順を追って話してモラエナイデショウカ？」

俺は床に突っ伏しながら片言になりながら尋ねる。

体はまだ動かないが、頭の方は落ち着きを取り戻している。

何度も言うが、いきなり魔王になれなんて言われても何の音か分からないし、どうしようもない。

すると少女は、突然泣き顔になって身の上話を言い始めた。

「それがね、それがね・・・。本来、魔王になる筈だったマー・オンさんがくじ引きで銀河系３周の旅が当たったって言って突然旅行に行っちゃったんだよ～・・・。おかげで私の計画はめちゃくちゃ！！魔王がいなきゃ世界が始まらないってのにドタキャンするなんてどういうことなの！！途方に暮れて彷徨ってたところを心優しいこの星の神様に出会ってね、気に言った奴を一人連れてってもいいって・・・うう、ありがとー神様ー！！」

少女は手を組んで天に向かって、感謝の気持ちをこめて礼を言い始めた。

自称とは言え、神様が神様を崇めるなんておかしな話だと思ったが、そこは触れないでおく。

「で、俺のことを気に入ったから無駄にしつこくついて来たってわけか？」

「その通り！なんかアンタから邪悪なオーラを感じた・・・気がしたからね」

「邪悪なオーラってなんだよ邪悪なオーラって！？俺そんなオーラを発するほど悪人じゃねーから！！しかもそこ気がしたからかよ！！あととっとと金縛りを解きやがれ！！」

俺は少女に向かってわめきたてる。

先にちょっかい出したのはそっちなのにブツブツ・・・、と呟きながら少女はパチンと指を鳴らす。

同時に体を縛る呪縛みたいなもんが消えたのか、不快な感覚がなくなる。

両手をグーパーと動かして体の調子を確かめてから、立ち上がって服を軽く払う。

「悪いけど、それは無理な話だわ」

俺が突然言い放ったその言葉に、少女は反応できずにポカンとした表情を浮かべたあと、焦ったような疑問の表情を見せた。

ここまで必死に頼んだのにあっさりと断られれば、誰だって焦ったりするだろう。

少女が何か言おうと口を開こうとしたときに、偶然重なるタイミングで俺は話し続ける。

「俺にだって生活はあるんだよ。そろそろ長期休みも明けて学校始まっし、部活だってやんなきゃなんねーしさ。俺、陸上部なんだけど顧問が厳しいんだよ・・・。それに家族だって心配するだろうからな」

だから無理だ、と俺は最後まで言い切った。

今言った言葉に嘘はない。

あと一週間もすれば学校は始まるし、部活はほぼ毎日サボることもできない。

家族にだってなんと言えばいいか、魔王になって来ますなんて言ったときには病院に連れていかれるだろう。

これだけ言えば諦めてくれるだろ、と俺は思っていたが、そうも上手く話は進まないようだ。

少女はなぜかホッとした顔をして言う。

「そういう問題なら大丈夫なんだよ。私は神様なんだから人間の一人や二人、時間を操って時空の旅に連れてくことだって簡単！それに魔王だよ？好き勝手に暴れても誰も文句は言わない、ていうか言えないんだよー？時間を気にしなくていい暴れ放題の旅行って考えてみたらどうかなかなー？」

徹底的に喋り方がウゼェ。

まあそうだな、と顎に手を添えて再度考え直してみる。

魔王なら何をしても許されるってわけではないけど、確かに魔王に文句を言う奴だってほとんどいない。

せいぜい逆らうとしてもお決まりの『あのキャラ』意外いないのだから、何をしたって咎められたりしないだろう。

溜まったストレスを発散するには丁度良いかもしれない、魔王というわけなら罪悪感もほとんど感じない。

それに時間を気にしなくていいのも凄く魅力的だ。

この世界とは別の世界を味わえるのも、息抜きだと思えばかなり良い。

旅行、という響きが俺をじわじわと呑み込み始める。

「さらにさらにィ！？魔王の特権、チート能力！！魔法を使うことも許可しちゃいまーす！！」

「魔王になります！！手続きをお願いします！！」

即答する。

俺は魔法と言う言葉に酷く惹かれた。

魔法にロマンを感じない人間は人間じゃねえ。

元気いっぱいの俺の返事に少女は満足げなニヤニヤした笑みを見せた。

「ありがとね！！この恩はとりあえず忘れないよ！！それで、私の世界の魔王様となる者の名は？」

「名前か・・・俺は『松岡（まつおか）　優介（ゆうすけ）』。以後よろしく。・・・で、そちらの名は？」

「『ルムナ』。それが私の名前だよ。では！！」

少女はそう言うとバッと両手を広げ、天を仰いだ。

そして、ニヤニヤと楽しそうな笑みを俺に向けて、地球の裏側にまで届きそうなほど大きな声を張り上げた。

「私の世界・・・『エーメントグラウンド』へ、魔王一名様ごあんな～い！！」

その瞬間、期待と不安を胸にして、俺の魔王としての新しく短い生活が始まった。

０４　新世界と痛恨のミス

気が付いたら、草原にいた。

なにを言ってるのか分からねえと思うが、俺もなにを言ってるのか分からねえ。

それは一瞬の出来事だった。

たった一回の短い瞬きの間に、我が家からこの草原に飛ばされたのだろうか。

目を凝らして辺りを見渡したが、地平線の果てまで緑が広がっていて、建物らしきものは一切見当たらない。

空には雲ひとつない綺麗な青色で染められていた。

やけに広い草原だな、と正直な感想とともに謎を違和感に気付いた。

なにも無い、草原？青空？

・・・それは、魔王がいるような場所だろうか？

俺のイメージでは、魔王は高い塔か城の天辺でふんぞり返っていて、その周りは荒れ果てた大地と赤黒い空があるんじゃないのか？

しかし俺の周りには、本当に何も無い。

ＲＰＧ風に言えば、ここは『始まりの草原』と言ったところか？

・・・それって、魔王が来るような場所じゃなくて、お決まりの『あのキャラ』・・・勇者が来るような場所じゃないのか？

「おいこら、責任者出てこい。ルムナ出てこーい」

「あ、なに？呼んだ？」

ふざけて言ったつもりなのに、なんてことか返事があった。

空から聞こえて、直接頭に響くような声だ。

それは確かに神様っぽいが、喋り方といい声といいどことなくイラッとくる。

しかし丁度いい機会なので思いっきり文句を言わせてもらおう。

「呼んだもくそもねえよ。俺って魔王なんだよね？魔王ってもっとこう、禍々しい城にいるもんじゃないの？なんだよここ。明らか勇者が来るようなところじゃねえか」

俺の迷惑極まりないクレームに対して、ルムナは少し黙りこむ。

しばらくして困ったような口調でルムナは喋りだす。

「いやあ、それがねー・・・。この世界は作ったばっかりだったから村や神殿の準備ばかりにうつつを抜かしてたら魔王の設定を忘れちゃってて・・・。や、途中まではちゃんと覚えてたんだよ！でもいきなりの魔王逃亡事件の所為で頭がこんがらがっちゃって・・・テヘッ☆」

「テヘッ☆じゃねえよ！！なんだよそれ、世界の管理人のくせにやけに適当だな！？手前ェ、その感じで色々と忘れちまってるんじゃねえのか？」

「ギクッ。そそそそんなことはないよ！！わわ私だって神様なんだからそそそそれぐらいちゃんと管理しててるよ！！」

「そんなこと言うわりにはめっちゃ動揺してるじゃねえか・・・。めっちゃ不安だけどもう良いよ・・・。そんなことより町だ、近くに町はないのか？」

「え、あー、うん。最寄の町は・・・西の方角に小さな町が一つあるね」

「・・・距離は？」

「ざっと２０ｋｍかな」

遠過ぎだろ！と声が漏れそうになるが喉で何とか押しとどめる。
地平線の果てまで何も無いのだから、それぐらい仕方ないだろう。
俺は大きく溜息を吐いてから再びルムナに尋ねる。

「念のため聞くけど、魔王としての力は使えるんだよな？さっきは魔法使ってもＯＫって言ったのに使えないってんなら流石にブチ切れるぞ？」

「それなら多分大丈夫。魔法とかの大事なところは一番に設定しておいたからね！」

「他の所は大事じゃねえのか。ま、その町まで行ってみるからナビゲート頼むわ」

「分かったよ。じゃあ、私が指す方向に歩いてってね。でもこんなことするのは特別なんだよ？君が新人の魔王様で説明もなにもしてなかったのと、スポーン地点のミスが偶然重なったからなんだよ？」

「どっちもお前のミスじゃねえか。俺に言われる筋合いはない」

しかし指すってどういうことだ？と俺はルムナに聞こうとするが、
その直前に突然現れた眩しい光に視界を奪われる。

一瞬俺は驚いたが、視力が戻ってすぐに成程、と納得する。

目の前には真っ直ぐ伸びた光りのラインが浮かんでいた。

それは恐らくルムナが出した西の村までの道案内だろう。

俺はそのラインに沿って歩き始めた。

開始早々で嫌な事件が起きたが、それも覆すほど面白い出来事もあるだろう。

俺はそう期待を込めて大地を踏みしめた。

０４　新世界と痛恨のミス（後書き）

しばらく更新遅くなるかもです。

05　表と裏と一つの門

「なあルムナ。いきなりで悪いけど、この世界について詳しく教えてくれないか？」

草原のド真ん中を歩きながら、どこからか俺のことを見ているであろうルムナに向かって尋ねた。

そしてどこからか俺の声を聞いてるであろうルムナは、少し不意を突かれたかのように驚いてから答える。

「どうしたの急に？突然そんなこと聞くなんてさ」

「だから悪いって言ったろ？まあ、ちょっと気になることがあってな」

正直言うと、ちょっと気になるどころの話じゃないのだが、そこは敢えて嘘を吐いておく。

この世界についてなにも知らないなんて不安だし、小さいことだって少しでも知っておきたいと言う理由からだが、それ以上に好奇心からという理由が強い。

俺の住んでいた世界（以後、現実と呼ぶ）と、この世界『エーメントグラウンド』はどのような違いがあるのか。

魔王の特権とやらの『魔法』が使える時点で『エーメントグラウンド』はファンタジー寄りの世界だということは何となく分かった。

しかし、それだけ分かってももっと詳しい所について全く分からないのでは仕方がない。

「んー、そうだね、。それじゃ、まずは『エーメントグラウンド』の特徴について説明しよっか。と、その前に・・・」

ルムナの声が、いきなり途絶えた。

いくら名前を呼んでも一向に返事が来ない。

なんだろうか、と俺はいぶかしんだが、その考えもすぐに別のものへと移った。

空から一つの光の塊が落ちてくるのは見えたからだ。

なんだアレ？と俺は思ったが考える余裕はなかった。

光はものすごいスピードで俺の方へと向かってくる。

・・・これ、完全に直撃コースじゃね？

「ヤバ・・・ッ！！」

俺はササッ！！と後ろに４，５ｍ避難する。

直後、ゴォオン！！と爆音を響かせ、光の球が俺が直前までいた場所に落ちた。

もし少しでも行動が遅れていたらと思うとゾッとする。

俺は恐る恐る目の前にできた小さなクレーターを覗きこんで、尻餅をついた。

クレーターから光の球が飛び出したのに驚いて、後ろに倒れたからだ。

光の球は良く見てみると、透明な小さい翅がパタパタと羽ばたいているのに気付く。

光の球は、伸ばす様に体をひねると（とは言っても球なのでよく分からない。あくまでそう動いたように見えた）、どこから声を出しているのか分からないが喋り始めた。

「ん～！やっぱこっちの姿の方が生き生きしてていいね！喋って会話できるのもなんかスッキリするし！！実体のない体でテレパシーで会話するのは息苦しいからね、神様っぽくはあるけど」

「・・・ん？この声、ルムナか？いやでも、その姿・・・」

「ご名答！よく私だって分かったね。姿についてはさて置いて、『エーメントグラウンド』・・・メンドクサイし『エーメント』でいいや、その説明をするね」

いや、そこはさて置くなよ。

しかもメンドクサイからって略すのはどうかと思うぞ、と思ったが口には出さない。

こんなのでも神様なんだし、姿を変えることぐらい簡単だろう。

この世界だってこいつの創った世界なのだから、どうしようとこいつの自由だ。

そうこう考えているうちに、ルムナは説明し始めていた。

「まず、『エーメント』は2つの世界に分かれてるの。表と裏って感じかな？私達が今こうして立っている・・・まあ、私は飛んでるけどね。こっちは表世界の『常界』ってとこで、もう一方の裏世界が『魔界』。で魔王である優介はー・・・その・・・」

「『魔界』に行く手筈だったけど、そっちのミスで『常界』に来ちまった、と・・・。流石神様だな、メンドクサイことしやがって」

俺はルムナに皮肉たっぷりに言い放ち、光のラインに沿って再び歩き始める。

ルムナはばつが悪そうに笑いながら、説明の続きを言う。

「テへへ・・・。で、その2つの世界を行き来するには、二つの世界どちらにも唯一存在している洞窟『深い迷い道（ディープウェイバー）』ってところにある『繋がりの門（ゲート）』を通らなきゃいけないの。だから第一目標はそこから『魔界』に行くことだね」

「本当にメンドクサイなおい・・・。ストレス発散のつもりで来たのに、逆にストレスを溜めることになんなんて・・・」

「ストレス溜める原因を作った私が言うのもあれだけど、ブチブチ言ってても仕方ないよ？ほら、町がもう見えてきたし。詳しい話はそこでまた言うね！」

ルムナはパタパタと翅を鳴らして数m先の道を飛び始めた。

俺は目を凝らして、光のラインのずっと先を眺める。

町が見える、ここからでは米粒程度の大きさでしか確認できないが、そこには確かに人工物らしき建物が存在している。

「まあ、まずはあの町に行くことが先決だな。宿屋か酒場で今後についてじっくり話そうじゃないか。・・・酒場には入れるか分かんねえけど」

俺はルムナに向かって呟いて、歩きっぱなしだった足をさらに速める。

エーメントに来て、記念すべき初めての町だ。

どんなところだろうか、どんな人がいるだろうか、どんなものが見れるだろうか、どんなものが食べられるだろうか。

俺の頭の中は、溢れ出る期待と興奮で一杯だ。

溢れそうにまでなる感情を抑えて、俺は遠くに見える町を目指して歩を速める。

町まで着く間も、どんなものや展開が待っているのかと興奮しっぱなしだった。

06　町の宿屋と若い男性

「いや～、ここは良いところだな」

俺は町の中心にある広場にいた。

そこでは多くの人が行きかい、情報や食料の交換、嗜好品などの売り買いが行われていた。

ようするに、市場だ。

肉屋らしき店の恰幅の良いおばさんや、新鮮な魚を売りさばいている筋肉ムキムキのおっさんたちなどの威勢のいい声が市場を騒がせる。

人混みに揉まれながらも、俺は広場の中央にある大きな樹の根元へ移動する。

そこは木の葉の日陰になっており、地べたに寝転がり一眠りしている人や、本を読む人がたくさんいた。

「ふふん、この町は特別力を入れたところの一つだから当然だよ！名付けて『ワンス・タート』！！」

「ふ～ん。ま、とりあえずは宿探しだな。今日はこの町に泊まって色々と見て回りたいし。なんか良い見世物とかあるんなら後で教え

てくれ」

俺は、懐に隠れたルムナの自慢を適当にあしらいながら、近くに宿屋がないか目を凝らす。

なぜルムナは俺の懐に隠れているかと言うと、今のルムナの姿はまんま妖精だ。

で、驚くことにだ、この世界には妖精がいるらしい。

妖精ってのはかなり珍しいらしく、コレクターの間ではかなりの額でトレードなどを行っているとか。

もし運悪く、ルムナの姿を見られでもしたらさらわれる可能性があるそうだ。

・・・なら、別の姿に変われば良いと言ったのだが、ルムナは『この姿が気に入ってるから嫌』なのだとか。

近い内に、こんなまがい物の妖精ではなく本物の妖精を見てみたいものだ。

そうこう考えながらも、俺は近くを歩いていた中年の男性に声をかけて宿がどこにあるかと尋ねる。

「宿屋かい？それなら東の大通りを真っ直ぐ進んで行ったら『鶏小屋』って酒場があるから、そこの二階が使えるよ。ここから一番近いだろうし、安いからね」

「東の大通り・・・分かりました。ありがとうございます」

「いえいえ、しかし君・・・中々変わった服装をしてるね」

男性にそう言われ、俺は自分の着ている服をチラリと見る。

現実の世界の、背中に英語が描かれている白いTシャツと黒い布地に白のラインが幾つか入った半ズボン・・・私服のままだ。

ここが現実の都会だとかなら何の違和感もないのだが、ここは全く別の世界。

周りを歩く人々は、まるでゲームの住人として出てきそうな、おとぎ話に出てくるキャラクターのような服装をしている。

そんな中、先程言った通りの服装の俺は明らか浮いている。

「はは・・・これはその、友人から借りた新デザインの服で・・・」

宿屋に行く前に、服屋に行きたいな。

男性に礼を言って、俺は逃げるようにそこから立ち去る。

確か、東の大通りと言ってたな。

俺は早足に広場から東の大通りへ移動する。

大通りには広場ほどの人はいないものの、活気は負けず劣らず騒がしい。

しかし、その騒がしさはなにも良いものばかりではない。

「おいおい、ここの酒場は酒も出せねえのかよ！！あぁ！？」

どこからか誰かの怒声が聞こえる。

その声の高さからして、まだ俺と同じ年齢ぐらいか。

恐らく、その声の主であろう人物が数十m先の酒場であろう店からドアを蹴破って出てきた。

俺の予想通り、そいつは若い男性で右耳に金色のピアスを三つも付け、ツンツンした髪を茶色に染めていて、いかにもガラの悪そうな奴だ。

本来なら近づきたくもない相手なのだが、そいつが出てきた酒場が俺の探している『鶏小屋』であるため嫌でも近づかなければならない。

そいつは機嫌が悪そうに口を歪めながらこちらに向かってくる。

俺はできるだけ目を合わせない様にそいつの横を通り過ぎようとし

た・・・瞬間。

そいつは、なにも無いところでいきなりこけた。

「・・・ぐふっ、ぐふっ」

俺は笑いそうになるのを必死に堪えて空を眺める。

真横から殺気をこめた視線を感じるが、今のシーンを見た後じゃ全く怖くない。

「・・・ちっ」

そいつは、わざとらしく舌打ちすると、ブカブカのズボンについた土を払い手をポケットに突っ込んで歩き去っていく。

しかし俺の笑いはまだ止まりそうにない。

数十秒ほど肩を震わせて、俺は視線を空から地面に移す。

キラッ、と。

日光を浴びて輝く、少し薄汚いコインを見つけた。

大きさは丁度５００円玉ほど、色は汚れているが元は綺麗な金色だろう。

・・・恐らく、さっきの奴の落し物だ。

多分、この世界で金銭の役割をしているものだと思う。

俺はそのコインを拾って、躊躇いなくポケットに突っ込んだ。

泥棒とかネコババだとかと言われても受け付けねえから。

「・・・安いんなら、足りるよな」

俺は独り言を漏らしながら、ボロボロになったドアに手をかけた。

07　『鶏小屋』のマスターさん

店はどんよりとした雰囲気で、数本の小さい蝋燭が店にほのかな温かさをもたらしている。

客も中々多く、ほとんどというか全員がおっさんだ。

店の雰囲気とは正反対に、うるさく思えるほどに騒がしい客達の姿は、昼間とは思えない雰囲気をかもちだしている。

しかしただ一人、ドデカイコップをボロキレで拭いている店のマスターと思しき男性はとても不満そうな顔をしている。

俺は不満そうな表情のマスターの元に近づく。

「あの、すいませ・・・」

「ったく、カイトの野郎・・・また店を雑に扱いやがって・・・。・・・ああ、いらっしゃい。先に言っとくけど、酒は駄目だからな」

カイトと言うのは十中八九、さっきの若い男性だろう。

まあ、自分の店をあんな風に傷つけられたら誰だって腹立つだろう。

「いや、カイトってのが誰かイマイチ分かんねえけど、酒なんか飲

まねえよ。俺はここの宿屋を使いたくて来たんですけど」

「あー、二階にご用ね。向こうの階段上がってすぐにある部屋が空いてるからそこ使えばいいぞ。ドアに『０１』って書いてあるから」

マスターはそういって酒場の一番奥にある小さな階段を親指で指す。酒場自体が狭いため、酒を浴びるように飲んでいるおっさん達の間を通らなければならないのが少し懸念してしまう。

まあ、とにかく、やっと休むことができる。

俺は二階に上がろうと階段に向かおうとする、が。

「ああ、ちょっと待ちな。まずは宿代を払ってもらうぞ」

ビクッ！！と、俺はマスターの声に過剰に反応してしまう。

挙動不審になりながらも俺は振り返り、冷や汗を垂れ流しながら小声で答える。

「や、やっぱ払わないと駄目・・・ですよね・・・」

「当たり前だろ。一日借りるってんなら３００Ｇな。二日以降は７

００Ｇで四日間まで貸せれるぞ」

Ｇ（ギルト）というのはこの世界での金銭の呼び方だろうか。

「・・・これで、足りますかね？」

俺はそう言ってポケットに入れてあった小汚いコインを恐る恐るカウンターに乗せる。

マスターは一瞬、嫌そうな顔をしたがコインを摘んで品定めをするような目でコインを見る。

マスターはやはり嫌そうな顔をしているが、コインを放り投げて後ろの木箱に入れた。

「５００Ｇだな、おつりの２００Ｇだ」

「ふぅ・・・。ありがとうございます」

俺はマスターから銀色の小さなコインを二枚受け取り、今度こそ階段を上って二階に上がる。

内心では、凄く安堵していた。

正直言うと、このコインが本当にお金・・・いや、Gなのか不安だったし、もしそうだとしてもたった一枚で足りるか不安だったからだ。

本当はGを払わずに逃げるつもりだったのだが、どうやらそんなリスキーなことはしなくても良いようだ。

「ええと・・・『01』って書いてあるドアって言ってたよな。あとルムナ、近くには人がいないからもう出ても大丈夫だぞ」

俺がそう言うと、懐から一つの光が飛び出した。

妖精の姿をしたルムナだ。

「――プハー!!息苦しかった!!死ぬかと思った!!」

「大袈裟すぎるだろ。まあ、とりあえず部屋でまた色々と教えてくれよ」

「分かってるってー。とにかく入ろうよ」

ルムナに急かされて、俺は湿気を含んで黒茶色になったドアに手をかける。

ギギィ、と嫌な音を立ててドアが開く。

部屋の内装はシンプルだった。

小さな木の机と、一応は綺麗と言える白いシーツのかぶせてある木のベッドが壁際にある。

そして部屋の中央に天井から垂れさがるランタンが一つ。

机の目の前にある小さな窓からの日光が、部屋を明るく染めている。

「あー、疲れた！！今日はもう一休みしたい！！」

俺の頭の上を飛びまわっていたルムナは、凄い勢いでベッドに突っ込んだ。

しかしベッドの弾力が強過ぎたのか、ルムナはベッドからはじき出されて壁に激突する。

ぶへっ、とううめき声が聞こえたが、そんなことは気にしない。

「休むのは別に良いけどよ、その前に約束通り『エーメント』について教えてもらうからな」

「ぶぶ・・・わ、分かってるよ。そんな釘を刺さなくても大丈夫だって！！」

「どうだか・・・」

「む！！信じてないでしょ！？分かってるよ、ちゃんと説明してから休むよ！！」

不機嫌ルムナさんの『エーメント』講座、始まるよ！！

07　『鶏小屋』のマスターさん（後書き）

正直、適当にしました。
反省してます、けど修正はしない。

08　エーメント講座と特別イベント

「『エーメント』の特徴はなんと言っても『魔法』！！『魔法』がこの世界を造ってるって言っても過言じゃないよ！！」

『エーメント』のどこかにある小さな町の小さな酒場の一室で、『エーメント』を創った我が儘でおしゃべりで神様らしくない神様が熱弁を振るっていた。

それを静かに聞いているのは現実から来た魔王様こと俺、松岡優介である。

「魔法を使うことは、実はそれほど難しくはないんだよ。ただ、魔法を使えるようになるまでの道のりと、元々の才能があるかが大切なの」

「でも、魔王にはそのどちらも必要無いわけで、ほぼ無条件で魔法をボンボン使えるって感じなのか？」

俺は自分の意見を述べてみたが、ルムナは羽音を低く鳴らす。

それは恐らく、違うと言っているのだ。

「ううん、魔王って言うのはようは『才能の限界を引きだした状態』

なの。『才能の限界まで』じゃなくれ『才能の限界を』ね。努力を才能で補って、才能で努力を覆すてところかな？そして魔王には特別な才能があるの。魔法は呪文を唱えないと使えないけど、魔王は詠唱なしでも強く念じるだけで魔法を使うことができるってね。まあ、魔力を大量に消費しちゃう大魔法は流石に詠唱が必要だけど」

「それじゃあ、俺が今掌から炎が出るように念じるだけで、炎が出てくることか。あとさ、魔法には詠唱が必要って言ってたけど、俺は呪文なんて全く分からねえぞ」

「大丈夫、さっきも言った通り魔法は念じるだけで使えるから。大魔法を使う時なんて早々ないからね！！それに、呪文って言うのは人や物から教えてもらうことができないんだよ。ほとんどの人は何らかのきっかけで才能が開花して、そこから努力して魔法を極めるの。才能が開花って言うのは、魔法を使うための呪文が頭の中に自然と流れてくる・・・ようは思いだすって感じ」

「そうか・・・それじゃあ、俺が呪文を使う機会は一生訪れないかもしれないと」

「ありていに言えば、そうなるね。そうそう、魔王の魔力は無限に近いけど有限であることは忘れないでね？魔力は生命力のようなもの。使えばその分疲れるし、なくなれば問答無用で死んじゃうから」

「マジっすか・・・。ＯＫ、魔法についてはよ～く分かった。他の

ことについて教え・・・そういやこの世界、創ったばかりってわりにはやけに文明が発達してるよな」

俺は部屋の窓から町を見た。

町中を歩く町人は皆、身を守る最低限の服装をしているし、馬車が町中を走りまわっている。

建築物だって、藁や土の家と言った雑なものではなく、木材やレンガでできたちょっとやそっとじゃ壊れない頑丈な造りになっている。

現実の世界では、世界ができたときは植物さえも存在してない状況で、人類が産まれたときには肌が出歩き回って洞窟に住まうといった生活を送っていた、というのにだ。

できたばかりの世界と言うには、俺の中の常識が異常だと訴える。

俺の質問に対して、ルムナは平然と言う。

「あー、うん。いやあ、全部初めから創るのもそれはそれで良いんだけどね・・・。でもね、長いんだよねあれ。何十億年も待たなきゃいけないなんてやってけないから、文明ができてる状態から世界を創ったんだよね。てへっ☆」

てへっ、じゃねえよ。

神様ってのは本当に何でも有りなんだなおい。

「もう良いわ。じゃああれだあれ、この町・・・『ワンス・タート』だっけ？確か特別力を入れたところっつってたよな。あれ、どういう意味だ？」

するとルムナは、なにかを思い出したかのようにハッとする。

「あー忘れてた。この町にはちょっと特別なイベントがあるだよ」

「・・・イベントぉ？なんだよそれ？」

「それはお楽しみだよ☆そんな早く教えちゃったら面白くないじゃん☆」

イラッ。

なんだその勿体ぶり方は、キラキラしてる謎の物体も妙に腹が立つ。

そう思ったが俺は言わず、再び質問を開始する。

「で、『ワンス・タート』以外にはどんな町村があるんだ？」

「んー、数だけなら千ぐらいは軽くあるけど。でも国って言えるほどの奴は一つしかないかな？」

「へえ、どんなところだ？」

「『ドラゴニア帝国』。『エーメント』で一番高い山のふもとにある『エーメント』最大の都市」

「ふんふん」

「因みに私達の目的地ね、そこの山。『深い迷い道（ディープウェイバー）』はそこの山『マウンベレスト』にあるからね」

「ふんふ・・・ん！？」

さりげなく言われたその言葉に俺は吹き出してしまうが、ルムナはまるで気にしない。

それどころか、こちらを見向きもせずに（正面がどこなのか分からないので性格には分からない）なにやらブツブツと呟いている。

「もうそろそろかな・・・ワクテカ！」

なにがもうそろそろなのだろうか。
俺はそのことについて聞いてみようとした。
――――そのときだった。
悲鳴が聞こえた。
一つや二つ、ではない。
町全体を呑み込むほどの悲鳴の波だ。
耳をつんざく程の悲鳴に、俺は耳を押さえてしゃがみこむが、すぐに状況の把握に努める。

「な、なんだ・・・！？」

「来た来た！！」

なぜかルムナは楽しそうにはしゃいでいる。
まさか、これが先程言っていたイベントというやつか？
とにかく、俺は急いで一階へと降りる。
酒場も先程までの活気は消え、客は皆酒を放り投げパニックに陥っ

ている。

マスターも大きな木箱を大事そうに抱え、カウンターの下に隠れ怯えている。

逃げ惑う人々にぶつかりそうになりながらも、俺はドアを勢いよく開け放ち外へ飛び出す。

外はいつの間にか夕方になっていた。

『エーメント』と現実では、時間の進み方が少し違うのだろうか。

町は、『鶏小屋』と同じようにパニックに陥っている。

人々は悲鳴を上げながら、一心不乱に逃げ惑う。

なにが人々をこんなにまで怯えさせているのか、その理由はすぐに分かった。

鼓膜が破れるのではと思うほどの獣の叫び声。

それは犬や馬などの動物が出せるような鳴き声ではなく、まるで映画に出てくる怪獣のように野太く、背筋を凍らせるような恐ろしい悲鳴。

町を覆うような巨大な影に気が付き、俺はすかさず空を見上げ、あまりの驚愕に目を剥き、声を張り上げた。

そこにいたのは、現実では決して存在しない架空の生き物。

「――ど、ドラゴンんん！？」

09　ドラゴン襲来

「ど、ドラゴンんん！？」

俺はあまりの出来事に絶叫した。

とても巨大な体と、それを支える為の鋭い爪の生えた大きな足。

巨大な体のさらに数倍はあろう強大な翼で空を羽ばたき、禍々しい紅い瞳で地上の生物を睨むその生物はまさしくドラゴンそのものだ。

そして、俺がドラゴンの存在に気付いた直後。

息を大きく吸い、あろうことかそのドラゴンは火を吹き出した。

狙いはすぐ下に建っている大きめの民化。

狙われた民家はあっという間に炎に包まれ、住人らしき人が鞭を打たれたかの如く転がり出てきて、人混みに紛れて逃げていった。

悲鳴が一層大きくなり、人の流れがさらに強くなっていく。

それだけで、俺が動くには十分な理由だった。

驚きと恐怖はすでに消え失せ、怒りに身を任せて強く念じる。

（落ちろ蚊トンボッ！！）

瞬間、ドラゴンに異常が生じる。

ドラゴンは、なんの前触れもなく地上へと落下を始めた。

翼をもがれた鳥のようにもがき、突然の出来事におぞましい悲鳴を上げ、しかしドラゴンは地上へと落ちた。

立っていられないほどの震動と、轟音とともに襲いくる強風から両腕で顔を守る。

・・・上手くいった！！

俺は小さくガッツポーズを決め、ドラゴンが落下した地点へと全力で走る。

流石は魔王の力と言ったところか、自分でもびっくりするほどの、まるで風になったのではと錯覚するほどのスポードで町を駆ける。

ドラゴンが落下したあたりから悲鳴はピタッと止み、地響きと家の燃える音しか聞こえなかった。

先程まで逃げ惑っていた人々は、一様にポカンと口を開いて立ち止まっている。

状況を呑み込めず、どうすればいいのか分からないといった表情だ。

（今のうちにとっとと逃げるよ・・・！！）

俺は走りながらそう思っていた。

すると、俺の思いが通じたのか・・・はたまた無意識のうちに魔法を使ってしまったのか、どこからか声が上がった。

「い、今のうちだァ！！一旦町の中央まで逃げろォ！！」

その声を合図に、人々は急いで、それでいて落ち着きを取り戻して町の中央へと迅速に逃げて行く。

俺は逃げる人々とは正反対に走る。

「ちょっと優介ー！！なにしてんのォ！？」

ルムナが焦った様子で叫び声を上げたのはそのときだった。

俺は走りながらルムナに返事を返す。

「なにってドラゴンを退治しに行くんだよ！！てか、これってお前の言ってたイベントって奴か？」

「そーだよッ！！なのになんで魔王が関わろうとしちゃってんのよ

！？」

「あんなバケモンに勝てんのはオレぐらいだろ！！なら俺が行かなきゃなんねえだろ！！」

「大丈夫だから！！それはちゃんと解決してくれるようにできてるから！！でもそこで魔王が関わっちゃ色々とおかしくなっちゃうからッ！！」

しかし、俺はルムナの言うことを聞かなかった。

というより、頭に血が上っていて聞けなかった。

いつもの俺なら、こんなヒーローじみた真似はしない筈なのだが、今回は違う。

魔王という強大過ぎる力を手に入れ、今ならどんなことでもできる。

なら・・・今はこの村を救うために動きたい。

「なんで止まってくれないのぉぉぉ！！」

ルムナの最後の叫びは、最後まで俺には聞こえなかった。

１０　ドラゴン撃退

俺はドラゴンの落下地点にすぐに着いた。

場所が案外近かったこともあるし、走るスピードが速かったこともあるだろう。

ドラゴンは空を飛んでもすぐに落とされることに気付いているのか、今はその巨大な両足で地を歩いている。

決して速いとは言えないが、一歩一歩の幅がかなり大きい。

・・・町の中央に着くのは時間の問題か。

俺がここで奴を食い止めなければ、この町は壊滅するかもしれない。

キッ！！と俺はドラゴンを睨んだが、怯むどころか俺の存在に気付いているかも怪しい。

「あーくそっ・・・。おいドラゴン！！こっち向けェェェ！！」

俺はじれったくなって、思わず大声で叫んだ。

ルムナの『うるさいっ！！』という文句がポケットから聞こえたが、そちらに意識を向ける余裕はなかった。

ドラゴンが遂にこちらに気付き、紅い瞳をギョロリと動かして俺を

見た。

瞳は拡大と縮小を繰り返し、光を失い濁っている。

それは興奮しているときの、または正気を失っているときの目に酷似していた。

なにか変だと思ったと同時に、ドラゴンが叫び声を上げた。

「――――ギュァアアアアアアアアア！！」

俺は再び耳を押さえてしゃがみこんだ。

目の奥がチカチカする。

器官が少しやられたのか、平衡感覚を失い倒れそうになる。

大地が震えていることを足で感じ取る。

これはもう声なんかではない。

衝撃波、だ。

「く、そやろォ・・・ッ！！」

俺は歯を食いしばり、立ち上がる。

ドラゴンは進撃を止めない。
数分も掛からずに町の中央へとたどり着くだろう。
それだけは、なにがあっても止めなければならない。
俺は意識を集中させる。

（倒れろ、トカゲ野郎がッ！！）

効果はテキメンだった。
ドラゴンは見えないなにかにつまずいたようによろけて、民家を潰しながら倒れた。
チャンスは、今だ。
俺は一息吐かず魔法を使う。

（燃え尽きろォ！！）

ドラゴンは悲鳴を上げ、全身を包んだ炎にもがき苦しむ。
地べたを転がりまわり、炎を必死に消そうとするが、後から後から燃え広がろうとする炎を消すすべはない。

やがてドラゴンの動きが鈍くなり、遂には止まった。

息絶えたのだ。

しかし、俺はそれを喜ぶことはできなかった。

一つの生命を潰してしまったことに対する罪悪感、ではない。

直後に襲い来る強烈な頭痛に、俺はうめき声も出せずに膝をついたからだ。

「――――ッ！？」

痛い。

痛い痛い痛い痛い痛い！！

俺は頭を抱えて、そのまま地面に倒れてしまう。

意識がドンドン遠くなっていく。

「ゆ・・・すけ！！ゆ、う・・・け・・・！？」

ルムナの俺を呼ぶ声が聞こえる。

しかし、返事を返すことができない。

声は聞こえるが、頭の中に留まることはなく、すぐにどこかへ抜けていく。

目を開くことさえできず、声を上げることもできず、ただ苦しむ。

世界が遠くなるのを感じ、俺は意識を失った。

１１　気が付けば『鶏小屋』に

一番に目に入ったのは木でできた天井だった。

湿気を吸い黒くなり、渦を巻いている木目のその天井には見覚えがある。

ここは多分、『鶏小屋』の一室だ。

窓からは町人達が騒いでいる声が聞こえる。

「むむっ？やっと気が付いた？」

声が突然聞こえ、それと同時に横たわる俺の目の前に少女の顔が飛び出した。

突然の声に驚いたのと、未だに残る鈍い頭痛で、すぐに誰だか分からなかったが見覚えはあった。

現実で出会ったときのルムナだ。

「・・・ルムナか？悪い、心配掛けたかな・・・」

ルムナは俺に答える代わりに、ホッと表情を緩めた。

しかしその表情はあっという間に消えてしまい、般若のような怒り狂った顔が現れる。

「全く！！本当になに考えてんの！！もうちょっとで死んじゃうかもしれなかったんだよ！？私の言ってたこと忘れた？魔力は生命力、それがなくなると死んじゃうって！！もう、アンタの世界の神様にじゃアンタを無事に帰すって約束してるのに」

ルムナの口から絶え間なく流れ出る言葉に顔をしかめながら、俺はしっかりと謝っておく。

「本当、悪かった。魔王の魔力は無限に近いって言ってたからさ、あれぐらい平気だと思って・・・」

「その考えがそもそも危ないんだよ！！相手は魔力に耐性のあるドラゴンで、しかも手から火を出すような簡単な魔法じゃなくて息絶えるまで燃え続ける上級魔法を念じるだなんて・・・命が惜しくないのか疑いたいよッ！！それ以前に私はちゃんと止めようとしたのになんで構わず突っ込んでったの！？優介の所為で私の計画はめっちゃくっちゃになっちゃったじゃなーいッ！！」

ああだこうだと休む間もなく説教を続けるルムナに、俺は反論するすべも反論する資格もなく『はい、はい・・・本当にすいませんでした。分かってます・・・』と謝るしかない。

しかし、ドラゴンは魔法に耐久があることと、俺の使った魔法がそんな上級魔法だとは聞いたことがなかったのだが。

だがそんなことを今言っても、火に油を差すようなものでしかない。

しかし、ルムナの説教もしばらくして終わる。

ルムナがアッとなにかを思い出したのか、顔を俺に向けて言う。

「そうだ。この町の町長さんが優介を呼んでたよ。なんかお礼がしたいってさ」

「・・・？なにに対してのお礼・・・いや、なにに対してかは分かるけど、なんで俺だって分かったんだ？」

お礼と言うのは十中八九ドラゴンのことだろう。

ドラゴンを俺が倒したおかげで（元々助けるつもりでやったのだが）村が助かったのだ。

町を治める者からすれば、感謝してもしきれない、といったところかもしれない。

でも、なんで俺だと分かった？

「知らないよそんなの。誰かが偶然見てただけじゃないの？」

対してルムナは突っぱねるように答える。

『あ～あ、折角の計画が・・・』とブツブツと呟いているが、かけてやれる言葉がない。

計画とは何なのかと不意に気になって仕方なかったが、今のルムナに話しかけるのは自殺行為だ。

同時に、あることを考えていた。

・・・偶然、見ていた？

あの命懸けの戦いを、誰かが偶然見ていたと？

確かこの町の住人達は、皆町の中央へと避難していた筈だ。

なのに自分からわざわざ戦場へ様子を見に来る奴がいたのだろうか？

もしそんな奴がいたと言うのなら、そいつはとんでもない阿呆だとしか言いようがない。

しかし、ルムナの言うとおりそうとしか考えられない。

「しかし・・・魔王なのにお礼だなんておかしいな」

「だからさっきから何回も言ってるじゃないの～ッ！！」

ヤベ、地雷踏んだか。

今にも爆発しそうなルムナから、俺は逃げるように部屋を出る。

「・・・このまま町長のとこまで行くかな」

俺はそう考えて外に出ようと一階に降りる。

酒場には誰もいなかった。

酒を飲み顔を赤くして踊ったり喋ったり喧嘩をする中年の客も、その客を呆れた目で見ながらドデカイコップをボロキレで拭いているマスターもいない。

どこに行ったのだろう？と俺は疑問を抱くが、今は外に行くことが先決だ。

今にも外れそうなボロボロのドアに手をかける。

太陽が沈みかけていて空が真っ赤に染まっていることで、今は夕方であることが分かった。

そして店を出た瞬間、俺は驚きで目を見張る。

店のすぐ目の前の道路に、道路に収まりきらないほど多くの人が立っていたからだ。

１１　気が付けば『鶏小屋』に（後書き）

話の内容が強引な気がしますね・・・。

12　斜め上の勘違い

「お、誰か出てきたぞ。あの人じゃないか？」

「まさか、あんな子供がか？」

「いや、話じゃまだ成人にもなってない若者と聞いたぞ。妙チクリンな服を着ているが」

「待て、あの服にはなにか意味があるんじゃないかな？魔力を増幅させる作りだとかさ」

「そんなことより彼可愛いわね。ファンになっちゃおうかしら」

ざわざわざわざわ。

道路全体に広がる話し声と、あまりにも多い人の数に俺は後ずさりしそうになる。

ルムナは小さな町だと言っていたが、この人数を見る限りでは小さな町とはとても思えない。

「おお、気が付かれましたか」

あまりの人の多さに目を白黒させていると、人だかりから老人の声が聞こえた。

すると途端にうるさく思えたほどの話し声は消え、老人の声がした辺りの人だかりが左右に割れる。

そこにはシンプルだが威厳あるローブを着た老人が立っていた。

そばには二人の屈強な男性が立っている。

老人は細い木の杖を突きながら、俺のすぐ目の前まで移動する。

「失礼、私はこの町の町長をやっている者です。話は町の者から聞いております・・・貴方が魔法士だと言うことも。町を救っていただいたことを心より感謝しております」

「え、あ、はあ・・・」

突然述べられた感謝の言葉に、俺はただ言葉を濁すだけで返事もできていない。

『落し物を拾ってありがとう』ならともかく、『町を救ってありがとう』なんていうスケールの大き過ぎる感謝に、どう対応すればいいかなんて分かるはずがない。

俺の頭の中はグチャグチャになっていくが、そんなことはお構いなしに話はどんどん進んでいく。

「貴方様には勿論お礼をさせていただきます。しかしその前に貴方様のお名前を教えて頂きたい」

「あ、は、はあ・・・。俺は優介って言います。あと魔王で・・・あ」

俺はそこまで自己紹介をして、うっかり口を滑らせたことに気付いた。

自分が魔王だと言ってしまった。

魔王がこんなところにいると知られれば、混乱を招いてしまうかもしれない。

魔王と言えば（俺のイメージでは）恐怖の象徴、世界に悪をもたらす存在。

現に町長の表情は凍りついていた。

・・・これはとっとと逃げる準備をしておいた方がいいか。

しかし、事態は俺の予想の斜め上を行く。

「なんと！！魔王！？魔法の王と書いて魔王！！」

「え、魔法の・・・？」

実際は魔界の王って意味なんだろうけど・・・。

俺はそう伝えようとしたが、町長の勘違いは治まらない。

「なんということだ！！皆の衆！！今すぐに宴の準備をするんだ！！魔王様を待たせるでないッ！！」

「あの、ちょっと・・・話を聞いて――――」

「了解です町長！！少しお待ちください魔王様！！」

「いや、だから話を・・・」

俺は消え入りそうな声で言ったが、やはり誰にも聞こえていないようだ。

それまで集まっていた人々が慌ただしく散って行くのを、俺はただ見守っていた。

各々、宴の準備とやらをしに行ったのだろう。

おかげで勘違いと言うことを伝えるヒマがない。

「ささ、魔王様。立ったままでは格好もつかないのでどうぞこちらへ。広場までご案内します」

もう、どうにでもなれ。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0760x/

魔王（正義）になりました。

2011年12月19日17時50分発行